

平成28年度 第2回 昭島市子ども読書活動推進計画策定委員会
会議録（要旨）

〔開催日時〕 平成28年9月23日（金） 18：00～19：30

〔開催場所〕 保健福祉センター（あいぼっく） 4階 講習室

〔出席者〕

- 1 委員：俣田委員長、真如副委員長、中島委員、山崎委員、武藤委員、久米委員、清水委員、大串委員、河村委員、藺田委員
- 2 事務局：石川市民図書館長、小澤係長

〔欠席者〕 なし

〔議事要旨〕

1 議題

（1） 昭島市子ども読書活動推進計画庁内検討委員会の計画（案）について

2 その他

〔配布資料〕

- 1 日程
- 2 第三次昭島市子ども読書活動推進計画庁内検討委員会の計画（案）

〔発言要旨〕

事務局 配布資料の説明をさせていただく。

第1回策定委員会で、現状をきちんと押さえ、課題、具体的な方策とのご意見をいただいた。このような意見をもとに資料を作り直し、先週皆様に送らせていただいた。

委員長 第1回で出された意見を踏まえて、加筆修正していただいた。

これから順に現状、課題と話を進めていく。

委員 現状は、読書、図書に関してデータは出ているが、その前に子どもたちが今、どういう存在に置かれているのかという状況認識という文言があっているのではないか。過去に特化して数字だけあっても良くわからないと感じる。

委員長 状況認識とは、たとえば具体的にどんなことをイメージされているか。

委員 昭島の子どもたちの状況を調査したデータがあって、この読書数を出す。と

いう書き方が必要なのではないか。

委員長 ご意見をいただいた。他にはあるか。

事務局 その辺りについては、検討させていただきたい。

委員長 具体的に状況を入れた方がいいというのは私も思うが、どんな数字を入れるかというのは、基本的にこの子ども読書活動推進計画があり、それに関わったものというふうになっていくと思うので、精査をかけていただいてご検討いただくということをお願いしたい。現状と成果について他にはいかがか。

子どもと本を取り囲む現状については、具体的には表のなかを読まないといけない。表を見なくてもわかるようにリードがあるといいと思う。

委員 小学校中学校の部分だが、数字が書いてあり、後ろに「課題」と出ているが、ここに書かれていることが課題なのか今後の対応策なのか解決策なのか、ちょっと混在しているような気がする。「課題」の書き方についてはもう少し検討していただけたらと思う。

委員長 これに関わって他にいかがか。

委員長 課題については少し精査をかけて、あるいはタイトルが「子ども読書活動推進計画の成果」となっているので、成果を書いたほうがいいのではないかとこの気がする。

副委員長 細かく分けるのではなく、この調査、質問に対しての成果と課題という書き方、そこをちょっと工夫されると。

委員長 個々のものではなく、少し括ったかたちでということ。

いくつかに分けて構わないと思うが、たとえば「児童への読書活動の取り組み状況」「学校図書館整備」「教職員」そのあたりの括りでまとめられるというのもひとつの案かな、というのが副委員長の意見ではないかと思う。

委員 成果が文にあるというところをきちっと前面に出す。個々の項目で不十分なところがあるというのは、課題になるかどうか分からないが、それは今後委員会の中で具体的に考えていくが、不十分なところは不十分なところとして、成果があったということを書いたほうがいい。そうしないと我々が次の計画を立てるときに問題点ばかりで成果がどこにもないということになる。

委員長 委員から成果を前に出していいのでは、というご指摘があった。

課題は課題としてまとめていくことでいいと思う。

委員 先程もあったが、改善しているところに「これまでどのような活動を行った結果このように数値が上がったのか」と書いてあった方が、今後続けていくべきこととかがわかりやすいと思う。たとえば「読み聞かせ活動を行った」と書いてあって、それで読書への関心が上がっていたら「この事業は続けよう」となると思う。他の委員も話していたように、課題でなく成果として具体的に何をしたかということ備考欄に書いてあるといいと思う。

委員長 確かに成果というのは、こういうことを頑張った結果、こうなっているということ。

他にいかがか。文言的なことでもよろしいかと思う。

では成果の部分については、今出た意見をもとに再検討していただければと思う。小学生、中学生、あいぽっくから公民館までであるが、このあたりはいかがか。

委員 これはそれぞれのセクションに聞き取りをして評価をつけたのか。公民館は実態と違うのではないか。

事務局 第二次の計画を作ってから毎年アンケートをし、なおかつ庁内会議をした結果である。繰り返して恐縮だが、傾向はだいたい同じである。

委員 児童センターの「図書室の蔵書の充実を図る」は、実際にその場を見ていないから何とも言えないが、僕が子どもを育てたのは世田谷区で23区の例で言うと、学童クラブセンターなどは子どもたちが自主管理して本を読んだり、貸し出したりしていた。その本は、図書館が使い古した10年も経って色が変わっているようなものばかりで、図書館に何故かと聞いたら「予算的に厳しいから、所管換えをしてそこに持って行っている。」という説明だった。

子どもが自分達でやろうと意欲を高めるためには、新しい本を入れてあげてほしい。なかには触りたくないような本もある。それはまずいと思う。

予算的な厳しさというのはわかるが、市民図書館の中でもそれに使えるような予算を確保して、子どもたちが「いいな」と思えるようにしていかないとまずいのではないか。

委員 読み聞かせ事業の定期化への一層の取り組みなど、職員に余裕がない現状で、体制を整備したなかで取り組むというようにしていかないと。

委員長 成果の部分については小学校、中学校、庁内各担当部署には、少しリードを加えていただくのと、課題というのはまとめていけるのではないか、成果の部分も強調して、そうは言いながらも庁内調査対象の部分では、若干Aが多くても大丈夫ということで。

3 子ども読書活動推進の課題、4 計画の基本的な方針はいかがか。

委員 推進の課題の前文のところ、子どもの読書活動を推進するためには、そこに関わる体制が十分サポートできていればいいのだが、昭島の図書館で図書館司書の辞令が出ている人は何人くらいいるのか。

事務局 職員、再任用、臨時職員のなかで10人。

委員 司書としての辞令交付しているのは。

事務局 司書という職は採っていない。職員は司書の資格を持っているが、嘱託は全員司書を採用している。

委員 そのあたりは、推進の課題の前に行政が体制整備をするのが必須条件ではな

いかと思う。図書館ではきちんとレファレンスをしているのか。市民図書館が開設した当初は、専門職や専門の館長を入れて頑張っていたが、現状は違うと思う。それで読書推進計画を立てるといえるのはいかなものかと疑問に思う。

委員長 厳しいところではある。課題のどこかに入れることは可能か。

事務局 司書のことは、具体的な取り組みで書いている。

委員 そこに入れるよりは、推進の課題のところではないかと思う。

委員長 課題のところに入れることで、後押しになるのであれば入れてもいいのかもしれないし、かえって障害になるのであれば。

委員 レファレンスができていないというのは、最初の方に出ていた課題が、保護者アンケートや学校に聞いた具体的なデータをもとにして、関心が下がっている、貸出数が減っている、そういう課題があると確認した上で、対策が立っている気がするので、レファレンスができていないというのを課題に加えるのであれば、図書館の利用者にアンケートを取るなどして、レファレンスがどのようにできていないのかははっきりさせたほうがいいと思う。

委員 来館者調査ってやったでしょ。アンケート。

事務局 委託している分館ではやっている。

委員長 そのあたりは出てきた声を少し入れ込むことは可能か。

事務局 はい。

委員長 子ども読書活動推進の課題というところで、図書館利用者の登録者数が減っていたり、貸出数が減っていたりする。このなかにも課題があると思うので何らかのかたちで触れたほうがいいと思う。

委員 登録者数が減少しているが昭島市の人口は減っているのか。

事務局 微増である。

委員長 子どもを取り巻く状況の変化を考えると、若干減っていると思われる。

委員 全国的な傾向である。文科省の調査でもここ5年間ぐらいは登録者数、来館者数、貸出数は減っている。いろいろ問題があるが、図書館の活動の中身の問題で、長年、貸出中心にやってきた付けが回ってきている。全体としてもものすごく増えているのは、例えばこの近くでは武蔵小杉駅に直結したような大きい図書館。

委員 今人気の「君の名は」の物語に出ている。コーヒーが飲めて、寝転がって読める、宿泊もできるとか、人気がある。それがいいかわからないが、若い世代の感覚というのをうまく取り入れるような役割、改革が必要。アウトソーシングというのではなくてね。

委員長 課題のくだりは前文のあたりを少し膨らませてもいいのかなという気がする。ご検討いただきたいと思う。

委員 私もよくわからないが、読書活動推進の課題で「乳幼児小学生へ」というの

はすごくよくわかるような気がするが、「中学生高校生など」という括り方はどうなのかな、と思う。高校生のところでは「この時期は自分ではおとなと認めていても、社会がまだおとなと認めてくれない世代です」とかなり主観的というか、中学生も「部活動、進学準備あるいは様々な活動が増えて時間が制約されていく」だから読書が少し減ってきている。特に青年期の括り方、分析はいろんな背景があるなかでのことだと思う。この短い文の中で分析をすることはとても難しいと思った。

委員 青年前期後期。中学生は青年期。

委員 文科省から依頼されて、3、4年前にある中学校の学校図書館の調査をしたことがあるが、そこはものすごく運動部活動が盛んで、校長先生が熱心。ある文科省の委員が「なんでこんな学校を選んだのか。こんなに運動部活動が盛んで、本を読むわけがないだろう」と言った。そうすると別の委員が「そうじゃない。それはおとなの問題だ」と怒った。「運動している生徒たちにはいろいろ課題がある。技術的、精神的、食事、周囲との関係、将来の問題など。ところが学校図書館には何もないじゃないか。子どもたちが今求めている本を学校図書館も市立図書館も置いていない。案内をしていない。そこが問題で、やはり我々がちゃんと考えて生徒たちが必要としている本を置かなければならない。王選手でも本を読んでいる。小学校中学校は、勉強や部活動が忙しいからと言って本を読まないというのはちょっと違う。もう少しその前に考えなきゃいけないことがある。確かに時間は制約されるが、そういう本があれば読もうという意欲がある。子どもたちが必要としている本を周囲、身近に置くということが大切。」ということだった。

委員 この文は上から目線で子どもを見ている感じ。

委員 中学校は、蔵書を変えた。スポーツ関係を置いたら子どもたちは手にするし読む。

委員長 このあたりの文言についてはもう少し精査する必要があるのではないかとこのことが出されていたと思う。

計画の基本的な方針では先程（1）「親が」「家庭こそ」と強調すると返って逆効果になるということで、事務局からの問いが出ていたので、ご意見をいただけたらと思う。

委員 最近ヨーロッパの福祉の調査結果で、2000年くらいまでは「家庭」という流れがあった。そうではなく「社会全体」として子どもたちにいい教育環境を、ということで必ずしも家庭だけではなく、たとえば家庭に不幸を抱えている子どもたちもいる。社会全体で保育園、幼稚園を含めて子どもたちを支える。必ずしも家庭だけではなく、社会全体が環境を整えて子どもたちを育てていくというのがヨーロッパの福祉の考え。教育プログラムを4、5歳児に適切に与え

ると、長期にわたる学習意欲の基礎ができる。だからいい環境を与えることが、長く勉強したいということで大学まで進み、それが社会全体の良質な労働力に反映されていくというのが最近のヨーロッパ。だから「家庭こそ」を強調するのは如何なものか。

委員 家庭も役割があるが、そういう時代ではない。少子高齢化も社会の責任。

委員長 今出てきたなかで「こそ」というのはちょっと強すぎるのではないかと。例えば「家庭は」とか。それから文脈があるのでなかなか難しいが、母親・父親を保護者とは言い換えられないので、いろんな家庭があるので、配慮しているということが伝わるように、可能なところは保護者と言い換えたほうが良いと思う。

副委員長 委員がおっしゃったことは書いておいたほうが良いのではないと思うが、一番大事なところはそこで、その後細かく、読書活動の礎としての家庭の役割だとかを。父親がいない、母親がいない、そういった子どもへの配慮でもあるので「父親、母親」と前面に出すのは如何なものか。配慮すべきところは配慮して。

委員長 前文に委員が話したことを入れる構成に検討していただく。

次に具体的な取り組みに入る。目標は、貸出券については7,000人、貸出冊数については10万冊に設定をする、というお話があった。

それを受け、具体的な取り組みとして、2「乳幼児の読書活動への取り組み」3「小学生・中学生の読書活動への取り組み」、以下4. 5. 6. 7と細かくなっている。

まずは「乳幼児の読書活動への取り組み」はいかがか。

「親・おとなと子どものつどいの実施」で読み聞かせが先程課題にあったところとリンクしている。

委員 主たる事業担当が公民館で、保育室だけで問題を考えるのではなく、公民館全体で公民館事業というかたちで位置付けないと、保育室を活用するというよりも子供を抱えた保護者が、講座に参加する時だけ保育室を利用しているわけ。だから、限定的である。限定的な事業でそれをやっても広がりが無い。保育室に特化しているからちょっと違うと思う。

委員長 事業内容を調整することで。

委員 文言調整したほうが良い。

委員 公民館保育室は限定された空間。公民館を利用する全ての人たちの幼児を抱えている人が利用されるわけではない。

委員長 「保育室を中心に」とか。より広く捉えている、という表現が良いかと思う。乳幼児はいかがか。

事務局 学校での取り組みで「担任」としたが、「学級担任」としたほうがわかりやす

いか。

委員 カタカナ用語のところ、※印で書いてある。※印は説明か。

事務局 はい。

委員 同じような日本語を使っているからこういうのは入れておいたほうがいい。

関係者はわかっているけど、横文字使う時は説明をつけてあげないとわからない。

委員長 リテラチャー・サークルについては先程説明があったが、もう少し説明を入れて。他は目にしたことがある方が多いと思う。学校での取り組みで、「司書教諭を中心に」と前に持ってくれば、担任でもおかしくない、構わないと思う。流れもいい。事業名「学校図書館充実」の「教育課程の展開に寄与し」はわかりづらい。もう少し言葉を砕いたほうがいい。

委員 オリンピック・パラリンピックは入れなければいけないのか。市町村の計画に入れるのか。

事務局 東京都の計画のなかで、オリンピック・パラリンピックが入っている。「市町村は準じたかたちで」と示されている。

委員 リアリティがない。今、「出来るのか」という状況である。その勢いで上から押し付けてくるなんて、ちょっといかがなものか。

委員 都政50年史を作るということで、前のオリンピックの担当者だった人たちのヒヤリングをした時、福祉の方々が非常に強調されたのは、障害者のスポーツということ、皆さん外国から来て、今まで日本の行政担当者が考えていなかったことがたくさんあって、それに対応する施設を作るとか、東京都の担当者にとっては衝撃的だった。今までと違ったような活動ができるのだということ、福祉の関係者が衝撃を受けた。そういったことで、むしろオリンピックよりもパラリンピックをきちんと取り組んだほうがいいと思う。オリンピック・パラリンピックへの関心が高まることで、市民に理解を深めていただいて、地域全体として、障害者が普通に生活できる環境をつくる。そういったことに繋げていけるような取り組みは必要だと思う。

委員長 パラリンピックのメダルが伸びないということで、障害者を取り巻く状況の反映なんじゃないかという課題を受け止め、もっと日本が障害者理解を進めて、具体的な施設の改善、環境整備を進めていかなければいけないということは、強く言われていると思う。

副委員長 他者への思いやりとかが言いたいところなのか。

事務局 はい。

副委員長 パラリンピックの命名が東京オリンピックだったというのを聞くと、そうだったのかと思う。学校現場では他者への思いやりなどしっかり勉強すること。図書室にも障害者の本を沢山入れている。

委員 全然関係ないが、2年ぐらい前に札幌で「未来の図書館」を書かれた方とお

話をしたが、アメリカのボストンで子どもを育てていらっしやって、学校で担当の先生と面接があるらしい。先生に「子どもの読書はどうしていますか」と聞かれ、「子どもが読みたいという本を積極的に買って与えている」と言ったら「それでは駄目だ」と言われたと。「世の中には目を背けるような事や嫌な事がたくさんある。差別であるとか、いじめとか。読書はただ単に楽しいとか調べるとかそういうことだけではなく、精神的、社会的な経験を広げる。親の責任として、子どもたちがなかなか読まない本、読みたくない本を盛り込んで薦める。差別に対してどう考えたらいいのか、いじめに対して自分はどうしたらいいのか、移民の方々でも違う文化を持っているからどう考えたらいいのかというのを、子どもたちにも自分で考えさせる。そういう社会的な経験を広げるような読書をしなくちゃいけない。」と言われたということだった。その通りだと思う。ここの計画にはそういったことは、将来の課題だと思うが、親御さんたちへの啓発の中でも、そういったことや、平和の問題などを取り組んでいく必要があると思う。

学校図書館も人がいる状態にしたほうがいい。文科省が、学校図書館は「癒しの場」でうまく学校に溶け込めない子どもたちのいる場としてあるべきだとの見解。学校図書館に人がいて、学校図書館を授業で活用するというのは大切なことで、全体として広く言うと、溶け込めない子どもたちの居場所としてはいいところであって、ただ、そういった子どもたちのためにお金をかけて人を雇うのかというのはあるが。そういったことも配慮したほうがいいと思う。

委員長 小学校にもボランティアの方が20人ほどおり、曜日に分散して来ている。委員が話したことは大きな課題として、声を大にして入れていただけるといいかと思う。第2章まで検討した。先程、常時開館や選書のことも出ていた。次回検討する計画の実現に向けてのあたりに盛り込んでいただきたい。委員が話したことも入れてもらおうと、より深みが出てくるのでご検討いただければと思う。全体を通して他にいかがか。なければ事務局にお返す。

事務局 今後のスケジュール（パブリックコメントを含む）の説明